心とからだの栄養

能岡　浄　【15】

感動のない生活が痴呆は

右脳を刺激しないのが原因に

人間の脳の表層には、百四十億個の神経細胞からなる大脳皮質があり、学習による記憶・知性を表す『新皮質』が大部分（約90％）を占め、この下には恨み・怒り・性欲などの動物本能的な感情を表す『古い皮質』があります。また、新皮質は働きにより、頭頂葉（頭のてっぺん）、後頭葉（後頭部）、側頭葉（耳の上側）、前頭葉（おでこ側）の4分野に分けます。

頭頂葉には知覚・運動・理解など、後頭葉には視覚などに関係した神経細胞群があります。側頭葉は、記憶の保存や物事を判断する細胞の集まりで、前頭葉から信号が届くと記憶の中から必要事項を引き出します。前頭葉は、思考・判断・創造など、『人間の最も高等な働きをする』部位で、脳の各部所の働きをまとめるために指令を出し、これが鈍ると、物忘れやボケ（痴呆＝ちほう）が起きます。精神分裂病・自閉症・うつ病なども前頭葉の指令と、脳の神経伝達の変調が原因です。

大脳を真上から見ると真ん中に溝があり、左右の半球（左脳と右脳）に分かれ、左脳は『考えて話す、計算』など意識・論理的なもの、右脳は『感動し涙が出る、喜怒哀楽』など無意識・直感の非論理を受け持ちます。このように、大脳皮質の各部位で分業した働きがあり、常に綿密な連絡を取りながら『人間らしい心が働く能力』が発揮されます。中年以降の痴呆者の脳を調べると、前頭葉から細胞が減り始め、頭頂葉・後頭葉、側頭葉の順に進んで脳は縮み、特にアルツハイマー病の脳は、前頭葉と側頭葉の萎縮が目立ちます。

毎日、事務や計算、機械相手の仕事などをしていると、左脳は使うが、喜怒哀楽や直感に関係する右脳を使わないから、無感動になりがちです。遊び心がなく、仕事一途の勤め人が退職し、趣味も友人も無く、ゴロ寝でテレビを見るなど『感動のない生活』は、前頭葉も筋肉も使わないからやせ衰えます。最近の調査では、65歳以上の病的な痴呆者は5％以下なのに70歳以上の約30％がボケで、趣味や人づきあいの少ない高齢者に起きる『生活習慣病』と言われ、右脳を刺激しなかったのが原因と見られます。痴呆が重症化するまでに3～5年かかり、現在では『かなひろいテスト（浜松方式）』により痴呆を早期発見できます。また『無表情、テキパキさが消えた、思い違いが目立つ』などの変化を家族が気づき、『熱中できる運動やゲームを皆と楽しむ、芸術や自然に触れて感動する』など、老人を孤立させず、昔の思い出話をじっくり聞いたりすると脳の各部所が刺激され、軽度のボケは治ります。

現代は、知識に偏った教育で『三無主義（無関心・無感動・無責任）』の生徒が多く、人間らしく振る舞う知恵を身につける情操教育が必要だと言われます。『ムカつく・キレる』など、『腹が立つ』と感じた瞬間に、相手を攻撃しているなど動物本能的な感情を表す大脳皮質の『古い皮質』の働きを、『新皮質』の知性で制御する暇がなく動物と同じ（畜生道）です。食欲・名誉欲など、自分の都合ばかりを考えている自我（左脳）中心の『人物（にんもつ）』から、言葉を通じて（右脳をよく働かせ、直感・情緒により）相手の心を知り、相手の身になれるのが『人間』です。人は人物と人間の間をゆれ動きながら生きている不安定な存在であることを思い知らされ、人間として生きる智慧を頂けるのが仏法なんです。

（大阪府立看護大学医療技術短期大学部・助教授）